

藤井 明

東京大学生産技術研究所教授。工学博士。1948年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻課程博士課程修了。建築計画・都市解析と並行して世界の伝統的集落の調査を行う。著書に「集落探訪」（建築資料研究所発行）、「住居集合論」（共著・鹿島出版会発行）など。

田村文子

OGGI JAPAN INC. 代表取締役。30余年、アクセサリ・製造小売業に従事。現在、全国主要都市62店舗にて、ブランド「GOGGI」を展開。世界に向けた独自の情報網をもち、「おしゃれ」の観点から、衣食住にわたる生活空間のプロデュースを手掛けている。



藤井 そのとおりです。形は異なっても、それぞれ何百年も存続しているのですから、それなりにうまく機能しているのでしょう。僕が集落から教えてもらった一番大きなことは、「答えはたくさんある」ということです。

田村 2つの模型の住居は、同じ風土に建つのに、まったく違うデザインですね。

藤井 わざと違いをつけているのです。それぞれの部族が、自らの共同体に属している人といない人をはっきり示す必要があるからです。もし風土への適応だけを考えるとつくっていたら、一番快適なかたちに収斂しているはずですが、それは違うのです。

「答えはたくさんあることを、集落は教えてくれました」（藤井）
「快適な住まいは、家族・場所ごとに違うのですね」（田村）



東京大学生産技術研究所・藤井研究室（東京・駒場）にて。奥がトーゴの住居、手前がブルキナファンの住居。

住まいづくりを考えているあなたへ。

感性を磨く

Lesson 7 「場所の力」を知る

対談 東京大学生産技術研究所 教授 藤井 明氏
OGGI JAPAN INC. 代表取締役 田村 文子氏

「途上国に学びたい人々と人を結ぶ方法」（田村）
「隣縁」をベースにしたコミュニティを」（藤井）

田村 偏見や格差を超えて生活を豊かに営むことは、難しいでしょうか。
藤井 その答えも、集落の中にあります。アフリカなどの集落は、基本的に部族単位ですが、すぐ隣には別の部族の集落があつて、それぞれのテリトリーが隣接している。当然、部族間で格差があるのですが、大きな戦争にはならない。それは部族ごとにコミュニティが閉じていて、お互いのコミュニティに干渉しないというきまりがあるからです。それぞれが互いに文化を尊重するからこそ、何百という部族が狭い範囲に集まっても共存できるのです。

田村 支援・援助の対象として見られてきた途上国の暮らし振りが、今、クローズアップされています。近代社会が生み出したさまざまな負の問題に、私たちが直面し立ち往生しているからなのでしょう。

藤井 私を訪ねて調査してきた集落は、何百年と続いているものが多いのですが、暮らしも受け継がれている。もちろん非常に貧しい、汚い。同じ21世紀に、片やニューヨークで桁外れにセレクトな暮らしをしている人がいる一方で――。私は集落に、人間はどのような環境でも生活をしていける驚くべき存在であることを確かめに行っているといえるのかもしれない。



手を遣り込める行為に至ってしまう。今、社会を見渡すと、よりどころとなる自分のコミュニティにも軋みが生じ、タガが外れる傾向があります。

藤井 地縁や血縁で結びついていた昔のコミュニティは、もう再生はできません。インターネットによって距離感はなくまりましたが、皆、住む「場所」があることは変わらない。よりどころとなるのは、やはり「場所」。生活圏から広がる、ある範囲内でのコミュニケーションの可能性を頼りに、緩やかなつながりをもつ新しいコミュニティを組み直すしかないと思います。僕はそれを「隣縁」と呼んでいます。

「生産の場があると空間は豊かになる」（藤井）
「毎日の暮らしに、つくりあげるといふ視点を」（田村）

田村 自分とは違う存在があることを認め、互いに尊重し合えないと相
藤井 この模型は、トーゴという国のタンベルマ族の大家族住宅で、世界遺産に登録されています。奇妙なデザインでしょうか。隣はブルキナファンの一夫多妻制のロビ族の住居です。いずれも西アフリカの辺鄙なサバンナ地帯にあります。

田村 どんなに斬新な現代建築をもつてもかなわないパワーがありますね。見てみると、暮らす人の活気まで伝わってくるようです。
藤井 僕は、日本の社会から活気がなくなったのは、住居から生産の場がなくなったからだと思います。寝て、ご飯を食べてという場所になっています。こうした部族の集落はもちろんですが、日本でも農村・漁村の住居は活気があつて空間が豊かです。空間が豊かになれば、当然そこで行われるアクティビティも高まる。今の都市の住まいは、ワンルームでも成立するレベルになってしまい、空間が非常にブアです。そこで「アクティブになれ」というのは無理がある。もし都市を活性化しようと思つたら、建物のほうから変えなくちゃいけない。



（上）イエメンの山岳都市。（中右）インドネシアのサダン・トラジャ族の舟形住居。（中左）カメルーンのマファ族のコンパウンド。（下）ベトナムのエテ族のロングハウス。

藤井 何でもものごとをお金で解決しようとする社会になってしまっている。「もの」や「こと」に向き合うとき、お金に換算するのではなく、それぞれの「もの」や「こと」には、それなりの文化的な価値があるという視点をもてば、違ってくると思います。

田村 同じようなコンクリートの建物の中の、同じような空間に暮らす都市生活は、そうした考え方の対極にある――。

藤井 かつてミース・ファン・デル・ローエ（1886～1969年）という建築家が、汎用性があり世界中どこにでも適用できる「均質空間」という概念を打ち出し、それにもつき四角いビルがどんどん建てられた。一見成功したかに見えましたが、40年経った今になってしつぱ返しがきている。答えも一つではなかったのです。うまくいかなかった理由は、「場所には力がある」ことを無視していたからです。かつてのよう

田村 何百年もついている集落をつくった人は、場所を見る目をもっていたのです。住まいづくりで大切なのは、家族の個性を見極め、「場所」をよりどころに、生活を創造するエネルギーを弛みなくもち続けること。それこそ本当の住環境の整備につながるのではないのでしょうか。



構内アトリウムに架けられた新工法によるテント屋根（設計／藤井明）。